嘘吐きの弾丸

武蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嘘吐きの弾丸

【Ｎコード】
Ｎ３７１０Ｙ

【作者名】
武蔵

【あらすじ】
『世界で唯一ＩＳを使える男』織斑一夏。その『発見』に、世界は沸いた。だがしかし、絶対的多数としてＩＳを使えない男は未だに存在している。その一人、帯刀（たてわき）という名の少年は、高校生とマフィアの鉄砲玉という二重生活を送っていた。そんな中、弟分であった一夏と、妹分であった鳳鈴音がＩＳ学園に入学するとの情報が入る。帯刀は幹部の命令に従い、ボディーガード兼話し相手（＝メンタル維持装置）としてＩＳ学園の整備科に編入することとなる。ＩＳに囲まれている中で、生身の人間がＩＳの繰り手を護衛する。

お偉いさんから押し付けられた課題に、チンピラ予備軍（ほぼ素人）は頭を抱えた。無理難題に追われる帯刀。使いどころのない、押し付けられた重装備。象に立ち向かう、ちっぽけな蟻である帯刀の明日はどっちだ！メカと少女、というよりも、硝煙とオイル臭い物語。言うなれば、似非ハードボイルド。とりあえず、始まります。

序章

人を殺すのに、武器などいらない。究極的に必要なのは、殺そうとする意思だけだ。

銃声が響く中、自らも『敵』に向かって７．６２ｍｍ弾を撃ち込みながら、俺はしみじみとそう思った。

それでは、殺意がなければ人を殺せないのか？

殺意もなしに引き金を引き、人を殺している俺は異常であるのか？

単純に人を殺すということは、物理的にはさほど難しい事じゃない。身体一つで人を殺した例など、調べてみればいくらでも存在する。

けれども、それは本能的に恐ろしいことだと人間は考える。無理もない。同族殺しは、ほぼ世界的なタブーである。だからこそ、そのタブーを打ち破るために、人は常ならぬものを欲するのだ。

例えばそれは、普通とは違う精神状態。殺意であり、それも含めた一つの狂気だ。そしてもう一つは、殺すという行為自体を、どこか遠くのものとしてしまえばいい。

つまり、武器を取るのだ。そうすることで、人を殺すということの罪の意識は希薄となっていく。殺意を生み出す装置として、あるいは殺意を肩代わりする装置としての役割を、武器に持たせたんじゃないだろうか。端的にいえば、武器を狂気の形代（かたしろ）とする。それが、人が争いの中から生み出した知恵なんじゃないかと思う。

結局の所、何が言いたいか。要するに、殺意がなければ武器を取ればいいじゃない。

「文明の利器、拳銃サイコー！」

とりあえず叫ぶ。大声を出したら、耳元を弾丸らしきヤバげなものが掠ったので、慌てて遮蔽物に隠れた。

ここは、東京の某所。ヤクザの隠れ蓑（かくれみの）、いわゆる「フロント企業」の自社ビルの中。普段は、一応企業然とした場所だ。

けれども今は、血を血で洗う戦場でしかない。自分の城を守ろうと、拳銃や日本刀、ライフルなんかを携え、侵入者を排除しようと暴力が飛びかっている。

そして俺は、その侵入者側だ。おまけに言うならさらに下っ端、いわゆる鉄砲玉である。

ホールド・オープンした年代物のトカレフにマガジンをぶち込み、スライドを引く。遮蔽物（しゃへいぶつ）とした壁から腕を出したら、あとは引き金を引くだけの簡単なお仕事です。ただし、銃の暴発と敵からの弾丸にはお気をつけ下さいって所だ。

俺は、軍人ではない。ただのチンピラもどきだ。正規の訓練なんかも受けていない。拳銃だって、前日に呼び出された際に初めてさわった位である。だから射撃の命中率は、数値化すると悲惨なものだろう。けれども運良く、俺が放った八発の弾丸は廊下の先を制圧したようで、俺達に向けられていた火線は沈黙していた。下手な鉄砲は、とりあえず数を撃ちゃ当たる。先人の金言は、確かに偉大だった。

後ろに控えるご同輩（どうはい）方につつかれ、恐る恐る廊下の先をのぞき込む。三人、床に倒れていた。ダークスーツを着ているため出血は目立たないが、彼らの指先はぴくりとも動いていなかった。

再び空となった弾倉を取りかえ、ゆっくりと倒れているモノに近づく。スライドを乱暴に引き、一人一人の頭部に向けて引き金を引き絞る。乾いた銃声が響きわたる。一発ずつ、フルメタルジャケット弾が、頭の中に吸い込まれていった。

そこに開いたのは、想像していたよりも小さな穴だった。派手に頭の中身が飛び散った訳ではない。拍子抜けしたと同時に、そんな事を考える自分に対し吐き気がした。

身体と思考を切り離す。弔いの代わりに頭を蹴っ飛ばし、死亡しているのを確認した。

再びせりあがってきた吐き気を飲み込みながら、思う。油断して後ろから撃たれるのは、単なるマヌケである。そして、命が軽いこんな場所では、どうも間の抜けた奴から死んでいく、らしい。
少なくとも俺はまだ、死にたくはなかった。そのためには、殺すしかないのだ。
せめて後続が踏まないように、足で死体を壁際に寄せた。そして仲間に合図を送り、先へと進む。
それから、ビル内を完全に制圧するのには、さほど時間はかからなかった。

ビルからの撤収後、ミニバンに詰め込まれる。ちなみに、行きはマイクロバスに詰め込まれるくらいの人数だった。損耗率(そんもうりつ)はざっと六割ほどだ。
その事実に顔色も変えず、大哥と呼ばれる上役はもっともらしく『出入り』を論ずる。

「突入から制圧まで30分ってところか。まあ、悪くない」

人数的な損害については、言及はない。おまけに言うならば、突入前、戦闘における目標なんかも聞かされてはいなかった。初対面の面々と言われたとおりに突入し、指示のあった経路で制圧した。それだけである。
ある意味、それも当然であった。突入組は、チンピラ上がりや食い詰めて『組織』に養われている者ばかり。いわば鉄砲玉で、いくらでも補充が利く存在だった。必要のないことを知る意味はないし、それは邪魔になるだけだった。
無論、ここにいるという事は、俺もその一人だ。少々、家庭環境は特殊ではあるけれど。

人の波をすり抜けるように、ミニバンは帰路につく。遅れてきたパトカーのサイレンが、やや間抜けな音でビル街に響いていた。
珍しく晴れた冬の空が、曇ったガラス越しに見えた。夜の空には、触れたら切れそうな三日月が浮かんでいる。金曜の夜、ビル街の中。街行く人々は響くサイレンにも目をくれず、足早に歩いていく。けれどもやがて、現場は野次馬に埋まるだろう。どこにでも、暇人というものは存在するものだから。
しかし、その熱はいずれ冷えていく。今夜の事件も、いずれ忘れられていくのだ。
ぶるり、と背筋が震えた。寒さに抗うように、ショットのレザーコートにねじ込んだ身体を縮め、ジーンズを穿いた脚を抱え込んだ。履いているダナーの黒いブーツがぶつかり、ごつん、と音を立てた。

とりあえずこれで、今夜はおしまい。明日からは日常に戻るのだ。世は並べて、事もなし。
自分の身に大小さまざまな出来事があれど、とりあえずはそう言えるようないつもの生活が続く。そう思っていたのだけれど。
所詮チンピラの出来損ないのような立場の俺にとっては、とりあえず現実は非情であるのだ。その事実を、俺は春の訪れと共に思い知る事となる。

――時は２０００年代初頭。インフィニット・ストラトスなどというマルチフォーム・スーツが一人の天才によって発明され、時代が変わりつつある頃。
そんな時でも、血を血で洗うような暴力組織同士の小競り合いは、未だに続いている。技術がいかに進歩しようとも、プリミティブ（原始的）な暴力は未だ有効な『手段』であった。
世界は、変わっていく。良きにしろ、悪しきにしろ。
それでも、ずっと変わらないものもやはり存在しているのだ。良きにせよ、悪しきにせよ。

序章（後書き）

ハードボイルド、目指してます。

第一話

横浜中華街がある山下町から山のほうへ向かい、石川町駅を通り過ぎた辺りで、風景はがらりと変わる。観光地の華やかな雰囲気から、雑駁（ざっぱく）とした集合住宅の群れに。まばらに道を行く人々も目の光が鈍く、町全体が灰色に変わってしまったかと感じられるほどだ。

古くは『ドヤ街』と呼ばれ、日雇いの港湾労働者達が一夜を過ごしていた街。その一角にある、古ぼけたアパートの前。そこに、黒塗りの高級車が停まった。

スモークがかけられた窓が開き、仕立ての良いダークスーツに黒のタイを締め、クリーム色のトレンチを羽織った男が顔を出した。周囲を入念に確認し、満足すると運転手にドアを開けさせる。そんな手順を踏み、男は寒空の下へと降り立った。

自らの懐に手を入れ、暫くまさぐる。男をちらちらと見ていた通行人は、その仕草であわてて顔を背け、足早に歩き出した。

それにも構わず男が引っ張り出したのは、ダビドフ・マグナムの箱だ。一本引き出し、運転手が差し出したデュポンのライターで火を点ける。美味そうに大きく煙を吸い込み、運転手へと目を向けた。

「少し、時間がかかる。暫く暇を潰していてくれ」

うなずく運転手を尻目に、男はアパートへと向かう。目指すは、二階の一番奥だ。

歩みにあわせて、イギリス製の革靴が金属の階段を叩く。

ドアの前に到着すると、呼び鈴も使わずにドアを乱暴に叩いた。

「おーい、帯刀（たてわき）の坊主。俺だ、さっさと開けろ！」

返事の代わりに呻（うめ）くような声が聞こえ、しばらくの後。眠そうな

目をした少年が、ドアから顔を出した。

「何です、陳の兄貴。こちとら昨日の出入りで疲れてるんすけど」

ダルそうな声色に、随分と砕けた話し方。それにも構わず、陳と呼ばれた男はニヤリと笑った。

「よう、起きてたか」

一声だけ返し、陳は、唇の端に張り付いていたダビドフをふかす。そして、こう言い放った。

「突然だが、帯刀の。高校、転校するつもりはねぇか？」

「……は？」

唐突な言葉に、少年は間の抜けた返事をした。けれども、詳しい説明の代わりに返ってきたのは、吐き出された煙草の煙だった。

彼の平穏な日常を叩き壊す使者は、煙と共にやって来たのである。

点けっぱなしのテレビからは、昨日東京都内で起きた大規模な暴力団同士の抗争について、ニュースが流れていた。

どうやら、未だ犯人の目星はついていないらしい。

――まあ、犯人、俺なんですけど。

テレビから目線を外し、目の前で二本目の煙草に火を点けている男を見る。

名字は陳。子供の頃からの兄貴分のような人であるが、名前は知らない。とりあえずは、オーダーメイドのスーツを着込み、高級ラ

イターと高い煙草を愛する伊達男である。
そして、名前からも分かるように中国国籍であるということ。加えて、マフィアの類の組織でそれなりに高い地位を得ているということだ。
俺がなにかしらの「仕事」をする時も、この人経由で斡旋(あっせん)されている。

それにしても、今回の話はどういう事だ？
高校受験の際に転居がともなったため、一年経ってようやく新しい環境にも慣れてきたところだ。
世話になっている身としてあまり強いことはいえないけれど、少しは異議も唱えたくなる。

「さて、真面目な話だ、帯刀の」

美味そうに煙草を吸い終わった陳さんは、ゆっくりとこちらへ目を向けた。

「『世界で唯一のＩＳを使える男』って知ってるか？」

「知ってるも何も。一夏の奴でしょ、それ」

織斑一夏。あの『織斑千冬』の弟。俺より一つ年下で、中学まで住んでいた街でよく遊びまわった相手である。ありていな言い方をするならば、友人、あるいは弟分だ。

「んで、今の中国の代表候補生って、知ってるか？」

「知るわけないじゃないっすか。そんな事」

少なくとも、代表の『候補生』レベルでは『知る人ぞ知る』というほどの知名度はない。興味のある人間は知っている。興味のない俺なんかは、まるっきり知るはずがないのだ。

陳さんは、どうももったいぶるような口調で、その名前を告げた。

「鳳鈴音（ファン・リンイン）だとよ」

鳳（おおとり）とは、何とも勇壮な姓だ。見当違いのことを考えながら、発音を漢字に直していく。中国語のネイティブという訳ではないので、どうもそこにタイムラグが生じてしまう。

けれども、名前に漢字を当てはめ終えた時には、俺は結構なショックを受けていた。何しろ、俺の中の人名録にも、その名前があったからだ。

ちんちくりんで、すとーんでぺたーん。もう一つおまけにツインテールという、どうもニッチな層にしか対応していないんじゃないかという外見。まさか、そのアイツなのか？

「……アイツ、ですか？」

恐る恐る、聞いてみた。

「うむ。お前も付き合いのある、鳳の家のお嬢ちゃんだよ」

あっさり返答は返ってきた。

俺は、一夏と友人である。ならば、必然的に鳳鈴音とも顔見知りな訳だ。

だが、鈴音の奴とは単なる友人という訳でもなかった。ガキの頃に両親を亡くし、細々と組織の世話になりながら暮らしていた俺は、命令によってボディーガードみたいな事をしていた。

というのも、鳳の家に、組織の上のほうにいる人間は何がしかの

縁があったらしい。それが巡り巡って、日本で暮らす際に不自由をさせない為というお題目で、腰が軽く同年代の俺にまわってきたのである。

もっとも、単なる中学生に大層な事件が起こるわけもない。生活の中で揉め事があれば陰ながら活動し、まあちょっと過保護な兄貴分的な役割をしていたのである。

昨年に分かれた時は、まあいつもの通りちんちくりんだったのだけれど。まさか、一年足らずで代表候補生となってしまうとは。大したものである。

「んで、だ。織斑のとこにも、ウチはちょっとした縁がある。おまけに、上の幹部連中達は、鳳嬢を猫かわいがりだ。二人に下手なことがあったらいけない、とのお達しでな」

「――んで、俺が編入することになった、と？」

絞り出した声に、陳さんはゆっくりと頷いた。

その様子を見て、とりあえず俺は頭をかき回す。考えろ。そこにはまだ、穴がある。

とりあえず、落ち着こう。俺は、テーブルの上に転がしていたホープ・メンソールの箱を開け、一本取り出し、手元に引き寄せたジッポーで火を点けた。

吸い込んで、吐き出す。さあ、平穏を護るための戦い、始まりだ。

「本格的なボディーガードなんて、俺にはできませんよ」

「そんな事、期待するはずないだろううよ。まあ、お前は話し相手兼最後の肉の盾ってところだ」

「いや、それにしてもプロを呼んだほうがいいでしょ、色々と」

「ＩＳ相手に生身でガチンコできる奴がいるなら、呼ぶけどな。実質的な警備は、学園の教師達でやっているらしい。何か起こるなんて事ぁ、そうそうない。せいぜい話し相手をしてこい」

嗚呼無情。バッサリである。だけど兄貴、今何かフラグを建てませんでしたか？

だがしかし、ここで諦めたら試合終了である。

「そのＩＳですよ。一夏じゃないんだから、俺は乗れませんって。どういう名目で入学するんです？」

「どうも、整備科っていう学科があるらしい。そこならどうにか潜り込める。ついでだから、整備や構造もきっちり学んできてくれると、後々助かるな」

ちなみに俺は、ガチガチの文系だ。なんとも無茶な話である。

「いや、その、第一！　ＩＳ学園ってのは、女しか入学できないって聞きましたよ！」

それもそのはず。ＩＳを動かせるのは、女性だけだから。男が入る意味など無い。

「織斑のトコの坊主が入るじゃねぇか。ああそう、学園側もそいつのメンタルケアの問題から入学を推奨してくれるってよ」

目の前の男は、言わばマフィアの構成員である。天下のＩＳ学園にどこまでできるかは分からないが、それにしても何か高圧的にねじ込んだに違いない。

けれども、触らぬ神に祟り無し、である。実際のところ、この問題は男一人がどうこうできる範囲を超えている。つまりは、俺なんかが関わることも畏れ多い雲の上の人々が、その権力を最大限に利用したのであって、所詮末端の人間たる俺は、唯々諾々として転校しかないのである。

口の端に銜(くわ)えた煙草から、灰がポロリと落ちる。目ざとく見つけた陳さんは、俺の口元に灰皿を寄せ、それを受け止めた。

そして、ニヤリと笑う。

「んで。転校、しない？」

「……承りました。転校、させて頂きます」

結局のところ、無駄なあがきだったのだ。

今回の話は、事後承諾ですらない。いわば、事後通告であった。

こうして俺は、平穏な生活にサヨナラを告げる事となったのである。

◆◆◆◆

そして時間は過ぎ、転入の前々日。世間一般では土曜日だ。

部屋を引き払い、高校の転出手続きも済んだ。大きな荷物はすでに学園のほうに送っていて、手荷物は押し付けられたものを含め、ボストンバッグ一つに詰め込んでいる。

あと持って行きたいものは、一つだけ。側車(サイドカー)付きのバイク、である。

免許を取って一年も経たないが、俺の持つ唯一の財産だ。乗る機会は無いかもしれないが、とりあえず持っていく分には許可が出たので良しとする。

ＩＳ学園へのメインの交通手段は鉄道だが、無論それだけでない。輸送や業者用として、ゲート付きではあるが道路は存在するのだ。今回はそこを通る許可をもらい、バイクを運搬するのである。

空になった襤褸（ぼろ）アパートの鍵を閉め、下に住む大家に返す。

季節は四月手前だが、夜になるとまだ寒い。肩をそびやかしながら、羽織ったＮＡＴＯパーカーの首元をかき寄せた。

手に持った革のボストンを側車に放り込む。ヘルメットを被ると、キーを捻り、燃料コックをＯＮにした。キャブレターのチョークを引き、キックを二回踏み込む。そうしてようやく、俺の愛車たるロイヤル・エンフィールドのブリット３５０は咆哮をあげた。

時間は夜六時前。少々遅いが、まあ、どうにか許容範囲だろう。

しばらくは縁のなくなるだろうバイクでのツーリングを楽しもうと、短いようで長い旅は始まりを告げた。

そして、走ること一時間。ＩＳ学園にほど近い駅にある、ショッピングモールのベンチにて。俺は頭を抱えていた。

「……この時間から行って、何処で寝ればいいんだよ」

アパートを引き払うのに、何やかんや時間を使ってしまったせいもあり、出発は夕方だった。普通に考えれば、夜も遅くになってから転入手続きなど出来るわけも無く、必然的に寮の部屋に入ることもできない。何となくテンションが上がって出てきてしまったものの、完全なる悪手だった。

「夕飯でも食べて、とりあえずどこかのネカフェにでもしけ込むか」

もう少し戻って知り合いの家に泊まるのも一つの手だが、如何せん急すぎる話だ。いくら社会的にはチンピラもどきであろうとも、心は純粋な高校生である。誰かに迷惑をかけるのは、ちょっと気が引ける。

とりあえず、何か美味いものでも食べよう。明日から寮生活であり、寮での食事なんて美味いものじゃないと相場は決まっているのだ。そして、狭苦しいネカフェのリクライニングブースで夜を明かそう。

そう、決めた。そして、俺はやたらと重いボストンバッグを腕にぶら下げ、レストランが集まるエリアへと歩きはじめた。

――突然ではあるが、食事にも『原風景』というものが存在するのではないだろうか。

味噌汁でも、何かほかのものでもいい。ふとした時に思い出す味。自分の中に、大切にしまっている食事の風景というものを、誰もが持っているだろう。

俺個人にとっての原風景は、レバニラ炒めと味噌汁であった。香港人の父と日本人の母との間に生まれ、食事についても両者の影響を多大に受けた。傍(はた)から見ると奇妙に映るかもしれないが、この組み合わせも案外オツなものである。

つまるところ、何が言いたいか。

「……味噌汁、ないんすか？」

「お客様。ここは中華料理店でございます」

ちょっとお高い、中華料理店の中。四人掛けのテーブルを一人で占領した俺は、店員とにらみ合っていた。

「いやいやいや、中華に味噌汁があわないって、誰が決めたんすか」
「お客様。味噌汁は日本の料理です。中華料理店で出すのは不自然でしょう」
成る程、一理ある。だがしかし。
「レバニラは、味噌汁と一緒に食べたいんだ！」
「知るか。他を当たれ」
けんもほろろ、だった。どうやら本当にどうしようもないらしい。
それでは、こちらにも考えがある。
「――じゃあ、排骨麺（パーコー）で」
「――レバニラはいいのかよ？」
「えっ」
注文をしたら、ドスのきいた声で追加注文を迫られた。店員は同年代の女の子だったが、ちょっと異様な迫力だった。
そして俺は、不本意な注文をするハメになったのである。

やや膨れすぎた腹を抱え、店を出た。
夜も9時近くなると、ショッピングモールを歩く人もぐっと減る。まばらになった足音をぼんやりと聞きながら、俺はこれからどうするか頭をめぐらせた。
一口にネットカフェを探すといっても、その方法は多岐にわたる。

インターネット上の情報を頼みにしたり、あるいは交番や道行く人に聞いてみたり。とりあえず見つけるだけならば、前者でいい。少しでも快適な時間を過ごしたいならば、後者を選ぶ。高校生にして体得した、貧乏旅行の知恵である。

結論。誰かに聞こう。場所を知っていそうな同年代にアタリをつけ、周りをぐるりと見渡した。

しかし、どうも女性が多い。ＩＳ学園に近いという、土地柄もあるのだろうけれど。

できるだけ、温和そうな。それでいて、好奇心の強そうな顔を探す。下手なのを引けば、結構なレベルの罵声が返ってくるのは分かっているので、聞く人間の選考は慎重に、だ。

一人の女の子に、目が留まった。やや明るめの茶髪に、フレームレスの眼鏡。温和というより、活発といった風情だ。首からぶらさげた一眼レフが、その印象をより強くさせている。

決めた、あの子に聞いてみよう。

ゆっくりと、近づいていく。警戒させないように、無用な負担をかけないように。

そして、視界に入るのは、正面からでも横からでもなく、相手から見て斜め前から。

「ごめん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど。時間いいかな？」

「……はい、なんですか？」

少し、受け答えが硬かった。初対面だから仕方が無い、と自分に言い聞かせ、言葉を継ぐ。

「ここらへんで、良さげなネットカフェってないかな？」

とりあえず一晩過ごせるような、と続けようとしたその時。

忙しない足音と共に、男達の怒号が聞こえてきた。

「待ちやがれ、そこのガキゃあ！」

一目でガラの悪い人種と見て取れる、黒スーツに派手な柄シャツを着た男達。およそ十人近い人数が、目の前に並んでいた。

見覚えは無い。だから、隣に聞いてみた。

「えーと、お知り合いですか？」

「いーえ、違います」

間髪入れずに答えが返ってきた。横目で見ると、気丈な様子ながらも、ある程度の怯えが見て取れる。

体の位置をさりげなく変え、俺自身が前に来るようにする。ついでに、後ろ手にしたボストンバッグの中に手をつっこみ、必要なものを探す事にした。

そして。やや怯えたような声で、目の前の男達に問いかける。

「あの、すいません。人違いって事はないでしょうか？」

「いいや、お前もそこの女もだ。こっちには、きちんと見覚えがあるんだよ」

その反応に、内心首をひねる。その間もボストンの中を探っていた手が、止まった。細長い、筒状の物体。ようやく見つけた。

キャップをひねりながら抜く。キャップ側を逆手に持ち、マッチを擦る要領で長いほうの本体側を擦り付ける。

そして、甲高い発火音が鳴りはじめる直前に。

「申し訳ないですけど、夜も遅いんでまたの機会にお願いしますよ！」

そう言い放ち、手の中の発煙筒を目の前に投げ出した。

煙が、撒き散らされる。

目の端でそれを確認するや否や。俺は目の前の女の子の手を握り締め、走り出していた。

男達の怒号が、一層激しくなる。それを押し潰すような音で、火災報知器が鳴りはじめた。

それに被せるように、ここ最近聞きなれた破裂音が聞こえた。拳銃の類だ。

悲鳴と、さらに激しくなった非常ベルの音をＢＧＭにして。まばらな買い物客の間を、すり抜けるようにして走っていく。

そして、幾度か角を曲がりきると、自動ドア越しに夜の空が見えた。

突き破るような勢いで、ドアをくぐり抜ける。自分のバイクまでは、もうすぐだ。

ふと思い出し、隣の彼女に声をかけた。

「乱暴で悪いな。俺はここからすぐに逃げ出すけど、あんたは何か足はあるのかい？」

「痛たたたた。助けてくれたのはありがたいけど、もう少し、優しくしてくれたらうれしかったかなー」

掴（つか）んでいた腕をさすりながら、彼女は最寄駅の名前を挙げた。そこまで行けば、学園に行ける、との事。

「……目的地は、ＩＳ学園かい？」

確認の意味も込めて、お伺いを立てる。そうすると、あっさりと肯定の返事が返ってきた。
さて、どうするか。追っ手があの程度で諦めてくれたならば、彼女の言う通りに駅まで送ってさようなら、で済むのだけれど。
もし、諦めの悪いやつらならば――

駐車場に甲高いスキール音が響くと共に、黒塗りの高級車とSUVが一台ずつ飛び出してきた。
どうやら、諦めの悪い人たちだったらしい。遠からず、街中に監視の人員が散らされる事だろう。

「実を言うと、俺も学園に用があるんだ。お嬢さん、悪いがしばらくツーリングに付き合ってもらってもいいかい？」

今まで使ったことのない、予備のジェッペルを渡す。走り去る車を見ていた彼女は、こくんと頷き、それを被った。
サイドカーに乗るよう指示し、自分のフルフェイスを被る。ぴったりとしたレザーグローブを付け、ジーンズのポケットにあるキーに手を伸ばす。
ふと思い立って、再び自分のボストンバッグに手を伸ばした。中からアウトドアブランドのゴアテックス・ジャケットを取り出し、サイドカーに座る彼女に投げる。

「夜だし、ちょっと飛ばす。俺ので悪いが、念のために着ておいてくれ」

我ながら、こっ恥ずかしい台詞である。赤くなった頬も、フルフェイスのおかげで見えないはずだ。
内心テンパりながらも、いつも通りにエンジン始動の手順を繰り返す。一発でかかったエンジンに機嫌を良くしながらも、今夜はま

だ一波乱あるという予感が頭をかすめた。

「さて、行こうか。つかの間の追いかけっこだ」

隣に声を掛ける。少し考え、こう付け加えた。

「まあ、安心してくれ。ボディーガードをするのは、ちょっと慣れてる」

嘘っぱちだった。

アクセルを開け、エンジンを吼えさせる。

風を切りながら進み、俺は内心こう考えていた。つまりは、これなんてエロゲ（kneg）？と。

ＩＳ学園の外周のうち、塀に囲まれている部分。そこには、清掃業者や食堂の関係者が利用する道路へと繋がるゲートがあった。

開閉は電磁式。高さは二メートル超。少なくとも、易々と乗り越えられる高さではなかった。見た限りは、そう簡単に破られるものでもなさそうだった。

しかしそれも、鍵が閉まっていたらの話だ。鍵が開いている門など、何の役にも経たずに素通りされてしまう。

そしてその鍵は、今俺の手の中にあった。鍵を開けなければ、中に入れない。

十字路の隙間から顔を出し、門の前を窺う。黒塗りの車が四台、門の横にベタ着けされていた。つまりは、鍵を開けたら、ＩＳ学園の中に侵入されてしまう。

控えめに言って、手詰まりであった。

「……ヘイ、そこの少女。どうすればいいと思う？」

「とりあえず、学園に電話して追い払ってもらうのはどうかなー、少年さん」

サイドカーに座る少女と間の抜けた会話をしながら、教えられたＩＳ学園の代表番号へダイアルする。

数回のコール音の後、繋がった音がした。と思ったら、留守電の音声が耳に入った。本日は土曜日、おまけに今は午後十時近い。

「……留守電で繋がらないんだけど。他の番号知らないか、そこな少女」

「――普通の高校生が、ガッコの番号を暗記してるだけでも褒められるべきじゃないかなーと思うんだよ、少年」

手詰まりだった。

考えろ。思考停止することは、生きているのではなく死んでいるのと同義である。

考えがまとまる前に、スマートフォンのディスプレイを指が滑り、ある連絡先を選択していた。

「それで、どうにか織斑センセに連絡ついたんだよね？」

「ああ、連絡はついた。けど、なぁ――」

陳の兄貴経由で、どうにか連絡はしてもらえた。

けれども、こちらの時間が足りなそうだった。続々と、黒塗りの車と人が集まってくる。いずれ、隠れたこの路地も見つかるだろう。時間は、向こう側に有利だった。

「少女よ、ホントに何もやましい事、やってないか？」
「少なくとも、あんな人たちに関わることはやっていないつもりなんだけど、私。少年はどうなの？」
「まあ、少なくともあの人たちには危害を加えた覚えはないな」
互いに自信のなさそうな顔を見合わせ、力なく笑みを漏らした。
「ウチ、家族にマスコミ関係者がいるんだよねー。色々ヤバいシマも渡ってるらしいよ」
「まあ、俺もヤクザ屋さん相手に仕事上でぶつかったことはあるよ」
方向性は違えど、共にとっ捕まって無事でいられる可能性は少ない。ならば、このままでいる事は得策ではなかった。
結局のところ、目の前のゲートを突破するのが一番の近道なのである。
俺は、再びボストンの中を探り、発煙筒を取り出す。残りは六本。半分を手に取り、隣に渡す。
「俺のほうは、とりあえずゲートに近づく時に投げる。そっちは、ゲートを開けている時に適当にばら撒いてくれ」
「りょーかい。使い方も、とりあえず大丈夫」
なら、善は急げだ。まずは一本目、ゲートから遠い場所に放り投げる。陽動だ。
キックし、ブリットのエンジンを始動させる。

二本目は、路地を出る角で。三本目は、ゲートの前の道で。
車の間を、掠めるようにすり抜けながら投げた発煙筒は、どうにか目隠しの役割を果たしてくれたようで、無事にゲート前に到着する。
けれども、音はごまかせない。未だ響く単気筒のエンジン音は、ごまかしきれるものではなかった。
投げられる発煙筒。薄い煙の中、ポケットからカードキーを取り出し、身を乗り出してスリットへと通す。ピピッという認証音が、やけに甲高く響いた。
ゲートはゆっくりと音を立て、開いていく。

「――発煙筒は、もう品切れか？」

「――残念ながら、ね」

ゲートが完全に開ききるのを、待つ理由はなかった。
サイドをぶつけながら、ゲートを無理に擦りぬける。
息をつき、ゲートを閉めてやろうとした瞬間、隣から、声が挙がった。

「気づかれたみたい！　ロケット砲みたいなの、担いでるよ！」

後ろを振り向く。確かに、ゲートの隙間から、オリーブドラブに塗られた鉄の筒がこちらに見えていた。そして、それに装填された弾頭は、あまりにも特徴的な形状だった。

「マジかよ、ＲＰＧだッ！」

おそらくは、世界で有数を争う知名度の対戦車ロケット弾。それが、こちらに向けられていた。

慌てて、アクセルを開ける。加速しきったところで左足のブレーキを蹴りこみ、地面を滑るように曲がった。そして、発射音が耳をかすめた。
ＲＰＧ－７の弾頭は、誘導性を持つものではない。どこかで聴いた言葉は眉唾物ではあったが、弾頭は右脇を通り抜け、その数秒後に爆発した。
アスファルトに舗装された道路に、赤い爆発炎が照り返す。軽く呆然とした後、後ろから追い立てるように響くエンジン音に、慌ててアクセルを開けた。
逃げる、逃げる。ＲＰＧ発射時のバックファイアにでも巻き込まれたのか、追ってきた車は五台ほどだった。
後ろからは、エンジン音と共に銃声が追ってきている。街灯が少ない上、揺れる車から発砲しているためか、とりあえず身体に鉛玉はめりこんでいなかった。
それでも、このままでは逃げ切るのは難しい。
そう判断し、俺はタンデムシートに括り付けた鞄の中に手を伸ばした。まず取り出したのは、紙箱である。

「悪いが、そこな少女。ちょっとこれ持っててくれ」

投げ渡す。慌ててキャッチした姿を横目に、本命を取り出した。銀色に光る銃身。全体的に大振りな、リボルバー式の拳銃だった。スミス・アンド・ウェッソン社のＭ５００、その４インチモデルだ。

「糞っ、こんな大砲を片手で扱えってか！」

コンペンセイターが付き、ある程度は反動がマイルドとなったといえど、片手で扱うような代物ではなかった。
トカレフの代わりとして、これを渡してきた時の陳の兄貴の得意気な顔が思い浮かぶ。

（なにが、『ＩＳ相手だったらこれくらい必要だろ』だ！）

燃えるアスファルトの上を、飛ぶように駆け抜けた。

炎に煽られながらも、左腕と体全体でバイクを押さえ込み、右手でＭ５００を握りこんだ。ハンマーを起こし、シリンダーを回転させる。後ろへ向かって手を伸ばすように、銃の狙いをつけ、引き金を絞った。

瞬間。右手を、爆発したような感覚が襲った。その反動に慌て、バイクのバランスを崩しかけながらもどうにか立て直す。

肩が外れていないのが、不思議なくらいの衝撃だった。当然のように、一発目は明後日の方向へ外れた。

「悪い、大丈夫か」

再びハンマーを起こしながら、隣に声を掛ける。

「大丈夫だけど、終わったらちょっと取材させてくれない？　私、学園の新聞部なの」

「――生きてたら、いくらでも」

そして、大砲をぶっ放す。反動も計算に入れて狙った結果、きっちりと炎を乗り越えてきたＳＵＶに当たったようだった。

急ブレーキの音が響く。後続の車はそれに反応できず、衝突音が響き渡った。

バイクを、ゆっくりと停める。ヘルメットを脱ぎ、ハンドルに引っ掛けた。

預けていた紙箱からきっちり五発分の弾丸を取り出し、ポケットに詰める。

ＮＡＴＯパーカの内側にぶら下げていたソード・オフしたショットガンを確認し、鞄から取り出した予備弾薬を、また別のポケットに詰めた。

「様子を見てくる。ヤバそうだったら、さっさと逃げてくれ」

言い捨て、バイクから離れる。十歩ほど歩くと、横転し燃えるＳＵＶの影に、動く人影が見えた。それに反応し、Ｍ５００を両手で握りしめる。

このままでも、やがてガソリンタンクに引火して乗員は死にゆくだろう。だがしかし、あの影が武器を持っていたら、今すぐに殺されるかもしれない。俺だけではない。つかの間の相棒だったあの少女も、無残に殺されるかもしれない。

殺されないためには、殺すしかなかった。

右の親指でハンマーを起こし、影に向けた照星を、照門にあわせる。

引き金を引いた。やがて放たれた弾丸は、あの影の主を殺すだろう。俺が死なない代わりに、あの命を奪っていくことだろう。

マズル・フラッシュが眼を灼いた。ほぼ同時に、轟音が耳をつらぬく。

視界が回復した時に、目の前にあったのは。水色のＩＳの後姿だった。

炎に照らされた人影は、まだ動いている。どうやら弾丸は、目の前のＩＳによって防がれたようだ。。

けれどもやはり、敵は殺さねばならない。後に禍根を残してはならない。

足を動かし、ＩＳの横をすり抜ける。再びＭ５００のハンマーを起こし、構えようとした瞬間。

「やめんか、馬鹿者」

声と共に、俺の顔面に拳が着弾した。

身体が、つかの間宙に浮く。そして墜落し、バイクのあった場所までアスファルトを滑った。

ごつん、とタイヤにぶつかり、ようやく停まる。そのままの姿勢で、アスファルトに大の字になりながら夜空を見上げる。

視界の端に、こちらを案ずるような顔が見えた。

「ちょっと少年、大丈夫なのー？」

「……ものすごいいたい」

身体は、無駄に頑丈なコートのおかげで問題ないが、殴られた顔面の痛みはしばらく消えそうになかった。

胸ポケットから、ホープ・メンソールを取り出す。ジーンズのウォッチ・ポケットに突っ込んでいたスターリング・シルバーのジッポーを取り出し、火を点けた。

上体を起こし、歩いてくる影に目を向ける。

休日だというのに、黒いスーツ姿だ。女性にしては、少し背の高い姿。特徴的なヘアスタイルに、鋭い目。日本が誇る『ブリュンヒルデ』、織斑千冬であった。

「ども、お久しぶりです」

「――ああ。こんな騒ぎを起こしてくれなければ、素直に歓迎してやったものを」

怒ってらっしゃる。まあ、当たり前だ。けれども俺は、みみっちい自己弁護を試みる。

「俺には、こいつらの見覚えはありません。そこな少女の関係者じゃないかと。あと、正当防衛ってことで、一つヨロシク」

「ちょっ、その言い方はないでしょう！」

私を売ったのか、と言わんばかりの目で睨みつけてくる少女を尻目に、揉み手をしながら愛想笑いを浮かべる。

織斑（姉）はそんな様子に、深いため息をついた。

「あいつらについては、今更識のところで調べさせている。お前達に与える罰は、それから決める」

そこまで言って、目の前の女性は俺に鋭い目を向けた。

「だが、お前のやったことは、結果的には未遂ではあるが正当防衛とは言い難い。申し開きがあれば、するといい」

織斑（姉）ではなく、その奥に目を向けた。燃えていた火は消えたようで、すでにいくばくかの人員が車の乗員を引っ張り出し、拘束する作業を行っていた。

その中で、こちらを見ていた少女と目があった。水色のＩＳを纏った、先ほど目の前に立った子である。彼女は、確かにこちらに悪戯っぽい視線を向けていた。

何となく目礼し、焦点を手前に戻す。

「殺さなければ、殺されていました。俺一人ならばまあ、尤もな理由があれば殺されても文句は言えない。けれど、たまたま拾ったあの子が殺されるのは、どうにも我慢がならなかった」

我ながら、醜い話だった。俺は、誰かを殺す理由をも、他人にかこつけている。
許しがたい、惰弱であった。
織斑（姉）は、暫く俺の顔を見つめていた。その目を、俺もぼんやりと見つめ返していた。
口の端に銜(くわ)えた煙草から、紫煙がたなびく。
静かな、にらみ合い。それを破ったのは、報告の声だった。

「織斑先生。救助を完了しました。重傷者は三名。その他は軽傷です。いずれも、致命的(フェータル)な状態ではありません」

「ご苦労、更識」

報告した声の主に、目を向ける。水色の癖っ毛、悪戯っぽい視線。先ほど、水色のＩＳを纏っていた少女だった。

「それで、奴らについて調べはついたか」

「詳しい動機は、警察の取調べを待つしかありません。けれども、所持品から、東京都内に本拠を置く暴力団の関係者であると思われます」

告げられた団体名には、聞き覚えがあった。最近、ニュースでよく聞く名前である。何でも、自社ビルにカチ込みをかけられたという内容で――
喉が、ヒュッと音を立てた。鋭く吸い込んだ煙草の煙に、俺はひどく咳き込んだ。
聞き覚えがあるはずだ。なぜならば俺も、カチ込む側の一員だったのだから。あの夜、トカレフの弾をばら撒いたツケ、それが回ってきたらしい。

顔が、一瞬で青ざめた。俺のせいだ。俺が、彼女を巻き込んだのだ。

『ごめんッ！』

謝る声は、何故かステレオで響いた。

もう一方の声の主は、まだサイドカーに座る、眼鏡の少女だった。

「えと、俺がちょっとやらかしたせいだと思う」

「いや、私もちょっとした揉め事があって――」

「成る程。つまり、お前ら二人共ががこの原因というわけだ」

困惑と共に交わされる会話に、氷点下の声が割り込んだ。

「罰は、後に伝える。とりあえずは、両名ともに学園内の指導室に顔を出せ。」

織斑（姉）の出頭命令には、頷くことしかできなかった。

やがて、パトカーのサイレンが響いてきた頃。必要のない人員は学園に戻るように、とのお達しがあった。

いつの間にかフィルターまで焦げていた煙草を携帯灰皿に放り込み、新しく火を点ける。

俺は、気の抜けたようにサイドカーへ沈み込む少女に、声をかけた。

「とりあえず、お疲れってところか」

「うん。お疲れさま」

無言の時間が、つかの間続いた。それを破ったのは、脇から首をつっこんできた、水色の少女の声だった。

「薫子ちゃん、怪我はない？」

「お疲れ、たっちゃん。大丈夫だよ」

眼鏡の少女と彼女は、親しげに声を交わしている。こうなると、部外者は黙るしかない。煙草の煙を吸い込みながら、俺はぼんやりとしていた。

「忘れていた。帯刀（たてわき）、校内は禁煙だ。ついでに、ガキの分際で煙草を吸うな」

不意に、口元に軽い衝撃。銜（くわ）えていた感触がない。煙草が吹き飛ばされたのだ、と思いつくと同時に目に入ったのは、巨大な刀の刃先であった。

その向こうには、織斑（姉）の鋭い目があった。

「――了解です、織斑先生」

「よろしい。ついでに、そこの二人もＩＳ（ここ）学園の学生だ。巻き込んだ詫びとして、自己紹介の一つでもするんだな」

そう言い捨て、その背中は離れていく。響くパンプスの音をＢＧＭに、俺達は口を開いた。

「更識　楯無。二年生。ここの生徒会長よ」

「黛　薫子でーす。同じく二年生だけど、整備科所属。新聞部の副部長をやってます」

二対の目に、じっと見つめられる。彼女いない暦＝年齢の人間としては、ちょっと気圧される光景だった。

だが、圧力には屈しない。

「帯刀だ。横浜の高校から、ここの整備科へ編入することになった。同じく二年生。どうか、よろしく頼む」

『――お名前は？』

あえて言わなかった名前について、突っ込まれた。

渋々、口を開く。笑いはコミュニケーションの潤滑油であると、割り切らねばならない。

告げた、名前。いわゆる、珍名記名であった。

それを聞いた彼女達は、夜道に華やかな笑い声を響かせたのだった。

ともかくも、これから。俺のＩＳ学園での生活が、始まることとなる。

第一話（後書き）

『側車付きのバイク』
『暴漢から少女を助ける』
『ＲＰＧだッ！』
『ハンド・キャノン』
もっと言えば、『組織』『構成員』
これ全て、いわゆるロマン枠です（笑）

１１／１０、本文改稿。口調訂正。
１１／１６、一部訂正。『笑いは会話のコミュニケーション』って何さ。

Appendix　01『荷物検査』（前書き）

字数調整のため、閑話的な意味で投稿。

Appendix　01『荷物検査』

――小鳥の囀（さえず）る声に、目を覚ます。
小さな窓から入ってくる光が、瞳を強く刺した。

一夜明け、俺は学園の自分に割り当てられた部屋にいる。
ベッド・サイドのテーブルにある煙草に手を伸ばし、火を点けた。
そして、細長い部屋の中を、ぼんやりと見回す。
どうにか生活できるだけの寝具類、最低限の調理器具はあるものの、その他はダンボールが山と積まれているだけ。
転入の申請は、昨日サイン一つだけで済んだ。今日は、この荷物をどうにかするのが、仕事となりそうだった。
白く燃えた灰を、クリスタル製の灰皿に落とす。これを吸い終わったら、顔を洗いに行こう。

ベッドから抜け出す。朝食代わりの菓子パンを、床に放り投げていた袋から取り出した。昨日のうちに買い込んでいそれは、突然のカー・チェイスのおかげで見事に潰れていた。
腹立ち紛れに煙を吐き出し、短くなった煙草を灰皿で押し潰して火を消した。
床に脱ぎ捨てたタイト・ジーンズに、脚をねじ込む。グレーのVネックカットソーに、洗いざらしの白シャツを羽織った。そして、荷物の中からハンド・タオルを引っ張り出し、首にかける。
あいにく、この部屋にはトイレはない。キッチンはあるが、折角ならば顔を洗うついでに諸々を済ませてしまおう。
裸足でフローリングの上を歩き、三和土（たたき）のサンダルを引っ掛けて、玄関のドアを開ける。目の前に広がるのは、青空をバックにしたグラウンドだ。

ドアを閉め、もう一度細長い『部屋』の外側を見回した。それは、船舶用コンテナを置いた、いわゆるコンテナ・ハウスである。断熱材は入っているが、エアコンの類はついていない。夏と冬が地獄であることは、もはや規定路線であった。

確かに、俺がここに来ることは、急に決まったかもしれない。ボディガードもどきとしては、下手に他の生徒の目に晒される『寮』という空間での生活は、不適かもしれない。それにしたって、この扱いはないと思うのだ。

どうせ一夏の奴は、その希少価値を十分に利用して寮で生活するのだろう。おまけに、聞くところによると寮は相部屋らしい。そしてあいつは、妙にモテるその性質を最大限に利用して、どうせ同室の女の子とイチャつくんだろう。正に、羨ましいの一言である。

口の中でぶつぶつと不満を吐き出し、学園のドアを開けた。休日ということで、薄暗い廊下は差し込む日光だけに照らされていた。サンダルのゴム底がリノリウムの床を叩いて、その音がペタンペタンと廊下に響いている。

やがて、目的地に着く。今年度までは女子高めいた空間だったらしく、いわゆる『男性用』のものは非常に少ない。数えるほどしかない男性用トイレなど、真新しくきれいなものだ。

丸と三角が組み合わされた青いマークのドアを肩で押し開け、鏡の前に立つ。ポケットから歯ブラシを取り出し、雑に歯磨き粉を塗りたくる。

口にそれを突っ込んだ瞬間、強烈なミント感が口中を飛び回った。感じるのは、ひりひりするのを通り越し、激辛の料理を口に入れたような痛みばかり。

よりはっきり言うと。舌の感覚が、無くなっていた。

「……『激烈、爽快感！　雄（オトコ）の目覚め！』、失敗だったかもなぁ」

毎日使う歯磨き粉に奇をてらった時点で、失敗であった。けれども開封したばかりであり、このまま捨てるのも忍びない。俺はチューブのラベルと睨めっこしながら、厄介払いの方法を考える。

結論は、すぐに出た。一夏の奴に押し付けよう。

後日、無理やり押し付けたこの歯磨き粉のせいで。一夏だけではなく様々な女性陣もこの痛みを味わうことになるとは、今の俺には知る由もなかった。

部屋に戻り、自販機で購入した牛乳で菓子パンを流し込んだ。珈琲でも淹れようか、と生活用品を詰めたダンボールを漁る。砂時計状のドリッパーに手が触れた、その瞬間。

インターフォンが、不意の来客を告げた。

ドアを開くと、刺すような鋭い目に、眼鏡越しの視線が二つ。それに、悪戯っぽく観察するような視線も一つ。織斑（姉）と昨日の少女二人に加え、背の低い童顔の女性が一人。その童顔で緑髪の女性は、ロリ巨乳眼鏡っ娘であった。眼福。

「――織斑センセ、何か御用で？」

「荷物を見せろ。過剰な危険物がないか、確認する」

その瞬間、俺は確かに安堵した。荷物検査をする、というのにだ。女性に見られたら気まずい雑誌類は、引越し前に資源回収へと出した。映像メディア類は、とりあえず友人に全部押し付けた。後残っているのは、ノートパソコンと外付けのハードディスク・ドライブのみであった。いくらなんでも、この中まで見られることはあるまい。

ちなみに、詰まれたダンボールの中には、俺も知らない荷姿のものがたくさんある。

おそらくは、陳の兄貴を含めた『組織』からのブツに違いないだろう。

俺がドアの脇によけると、彼女達はずかずかと部屋の中に入っていった。少しは、遠慮をしてくれないものだろうか。

ため息を一つ吐き、俺は彼女達に声をかけた。

「とりあえず、珈琲でも飲みながらやりません？」

異論は、無かった。俺は、琺瑯（ホーロー）のポットを火にかけ、ブルー・マウンテンをハンドミルでゴリゴリと挽きはじめるのだった。

五人分、それぞれの傍に珈琲カップを置いて、荷物の開梱作業が始まる。

まず目に付いたのは、直に配達会社の伝票が貼り付けられたゴルフバッグであった。

「何なんでしょうか、これ」

「さあ、何でしょう。とりあえず、開けてみますね」

先ほど自己紹介を交わした緑髪の女性、山田先生と顔を見合わせ、俺はそれを開ける。

そこには、ゴルフクラブが十四本。しかもどれもが同じ、ステンレス製の一番ウッドであった。

一同、無言になる。

「何かあったときは、これで殴れってか」

「――次ッ！」

俺のぼやきに被せるように、織斑（姉）の怒号が響き渡った。
それに応じて引っ張り出したのは、平べったい形をしたダンボールである。
その中には、的となる円盤と、銀色に鈍く光る金属製の矢が入っていた。
それを見た黛さんが、俺に話しかける。

「これ、ダーツだっけ、少年」

「ハードダーツだな。こんなナリだけど、金属製なんで人に刺さるぞ、少女よ」

「たしかに、武器といえば武器ですけど……」

「――次」

山田先生のフォローに被さるように、再び次を促す声が響き渡った。

引っ張り出したのは、ジュラルミン製のケース。それを開けると、分解されたライフル銃が入っていた。
それを見た織斑（姉）は、ようやく安堵するような声を漏らした。

「バレットＭ９５か。まあ、こんな所だろうな」

「帯刀くん、だっけ。こんな物、どうやって仕入れてきたのかな？」

「俺が聞きたいよ、会長さん。多分、香港あたりを経由してきたん

だろうけど」

五十口径の対物ライフル。これ位ならば、ＩＳにも少しはダメージを与えられるだろう。そう思考しかけ、あわててその考えを投げ捨てた。

いやいや、俺は、単なるボディーガードもどきだったはずだ。ＩＳなんぞとドンパチやる必要はない。よって俺には、無用の長物であるハズだ。

織斑先生から、地下で射撃練習くらいはさせてやる、とのありがたい言葉をもらった後。俺は、最後に残しておいた二個口のダンボールに手をかけた。

一つ目の梱包を引き剥がす。中には、油紙に包まれた長方形のかたまりが煉瓦状（れんがじょう）に積まれていた。

一つを取り出し、油紙を破り開ける。中から出てきたのは、オフホワイトの粘土のような物体だった。

「おっどろいた。これ、Ｃ４よ」

「……たっちゃん、Ｃ４ってなーに？」

「爆薬だよ、小娘ども」

その声にずざっと音を立て、壁際に移動したのは二名。山田先生と、黛さんであった。

「山田君。爆薬であって、爆弾じゃない。というか、君が離れてどうするんだ」

「二人とも。このままじゃ爆発しないから、そんな離れなくても大丈夫よー」

苦笑しながら声をかける、織斑（姉）と生徒会長。その声に後押しされるように、二人は戻ってきた。
一方俺は、軽く腰が抜けていた。
少なくとも、こんなのは俺みたいな鉄砲玉に扱えるシロモノではなかった。

「――一体、こんなんで何をさせるつもりなんだよ、陳の兄貴」

「――ボディーガードだろう。少々、理解に苦しむチョイスだが」

俺と織斑（姉）は、顔を見合わせてため息を吐いたのだった。
ちなみに、もう一つのダンボールにもＣ４が満載だったことは、言うまでも無い。

Ａｐｐｅｎｄｉｘ　０１『荷物検査』（後書き）

タイトなジーンズ→ねじ込む
洗いざらしの白シャツ→少女漫画的なアイコン

武装なんてこんなもんです。人に対しては重装備。ＩＳに関してはほぼ無力。
伊達と酔狂で適当に選んだ装備類。まあ、最近は戦争するのかって重装備を持ってる暴力団も増えてきたようなので、こんなんでも大げさではないんじゃないか、なんて思います。

第二話

明くる日。俺の転入日、そしてＩＳ学園一年生の入学の日でもある。

今更ながら、俺は一つの疑問を思いついていた。それは、あまりにも遅すぎる問題提起であったことは、否定は出来ない。

「一夏や鈴のボディーガード役だってのに、どうして俺は二年生に編入するんだろうか」

無論、虚空に問うても答えは返ってくるはずがない。

真っ白い制服を身に着けながら、スマートフォンを手に取る。陳の兄貴に連絡をしようとして、俺はその手を止めた。

「やっぱ、餅は餅屋だよな」

そう呟き、俺は必要な荷物をまとめ、ある場所へと向かったのだった。

「帯刀、ここはＩＳ学園だ。それは分かっているな？」

織斑（姉）曰く。

ＩＳ学園は、正式名称を『ＩＳ操縦者育成特殊国立高等学校』という。つまりは、徹頭徹尾ＩＳの操縦者のための学校なのである。本来であれば、それを使えない俺なんぞお呼びではないはずである。

おまけに言うならば、『国立』と銘打ってはいるものの、その実、アラスカ条約、つまりはＩＳ運用協定参加国によって雁字搦めとなっており、常に国際社会の目に晒される場所でもあった。

「一年次のカリキュラムは、ＩＳの操縦方法を含めた基礎的な教育と一般教養だ。二年次になってようやく、研究や整備を専攻とした整備科に分科する」

ここまで続け、職員室の机に陣取る『織斑先生』は、俺に淹れさせた珈琲で喉を湿らせた。全く、質問に来た生徒を顎で使うなんて、教師の風上にもおけない存在である。

「やかましい」

轟音一発。出席簿が、俺の頭に突き刺さった。痛みを感じるよりも早く、やたらと鈍い衝撃に頭が揺さぶられる。

比喩ではなく頭をぐわんぐわんと揺らす俺を横目に、織斑先生は言葉を続けた。

「ＩＳの使えんお前に、ＩＳを動かす方法など教えても意味がない。動かせないものについてあれこれ指導されても、お前は困るだろう。無論、教える側である私も困る」

あれか、最後が本音なのか。

「幸いな事に、一夏の奴は私が担当するクラスだ。授業中は私が目を光らせているので、お前は何も心配せずに自分の勉強をしろ。整備科ならば、お前の努力次第でまだどうにかなる範囲だろう」

しかし、この人も色々と謎である。どうして、この年齢で世に出てから数年ほどしか経っていないＩＳの教師なぞやれているのだろうか。

俺の思考をよそに、目の前の女性は話を続けた。

「まあ、実際として、お前にボディーガードとしての役割は期待していない。せいぜい、あいつ等の話し相手になってくれたらいいんだ」

結局のところ、俺がこの学園に来た理由は、ブラコンの姉が急な変化に直面する弟の心配をしたせいだったのかもしれない。

まあ、それはともかく。

「――織斑センセ、ちょっとした疑問があるんですけど」

「言ってみろ、帯刀」

「まず、俺がこの学園に入った名目について」

俺がこの学園に転入したのは、一夏と鈴のボディーガード兼精神安定剤として、である。けれども、対外的にそれを堂々と宣言するわけにもいかない。それをしてしまったら、ＩＳ学園がＩＳを操縦できない人間であふれかえる。そして少なからず、警備・諜報上の問題が出てきてしまう事だろう。ＩＳには、様々に国家のデリケートな部分が付随するからだ。

よって、俺には建前が必要だった。とりあえず、他人を納得させられるような建前が。

「ふむ」

考え込むように、目の前の女性は虚空をにらんだ。そして、やにわに口を開く。

「ＩＳ学園のカリキュラムに、ＩＳを操縦できない人間がどれ位適応できるか。そのテストケースとしての意味合いがある」

つまる所、一種のモルモットである。扱いに文句も言いたくはなるが、無用な波乱を起こすつもりはない。奥歯で不満を噛み殺した。

「加えて、一昨日の暴力団による襲撃も含め、瑣末な事件もたびたび起こる。今までは、学園の教師なりがそれに対応していた。だが、『貴重なＩＳ操縦者の時間をそんな雑事に費やすのは馬鹿らしい』、そんな意見も外にある。そこで、ある程度荒事にも対応できる男を、いわば警備員としてテストするためでもあった」

まあ、こんなのも対外的な理由だな。そう嘯き、『織斑先生』は珈琲を口に含む。

「結局の所、私だってお前一人くらいなら捻じ込める権力はある。ましてやここの理事長だって、今ではお前の転入には全面的に賛成しているんだ。『学園生徒の危機を救ってくれた』とな。」

そう言って、目の前の女性はまっすぐに俺の目を覗き込んだ。

「だから、お前は安心して勉学に励めよ、高校生」

「――了解です、姉御」

冗談めかしてそんな事を言ったら、再び轟音と衝撃が頭の中に響いたのだった。

余談ではあるが。その後の要望として、一昨日の『罰』の減免を要求した。さすがに、ＩＳ訓練用に使われている『打鉄』全機を、

助けがあるとはいえ独力で整備するなどという事は、門外漢にはどだい無理な話ではないか。たとえそれが、一日だけの期間限定であっても、だ。
けれども、それが無駄な足掻きであったことは言うまでもなかった。それを、俺は三度の轟音と共に思い知ったのである。

◆◆◆◆

そして、教室である。
三十人弱はいる女の子の中に、男は一人だけ。傍からみれば羨ましい状況かもしれないが、その視線に晒される側からみれば、冗談でもそういう事は言えそうにない。
何せ、俺の一挙一動に視線が向けられている事を、実体化しているんじゃないかっていう位の圧力で感じるのである。
正直、たまったものではなかった。
黒板の前に立ち、ざっと教室を見渡す。黛さんが軽く手を振っていたので、目礼で返した。

「それじゃ、転校生。自己紹介を」

担任であるヨーロッパ系の女教師に促され、口を開く前に。俺は黒板へと向かい、大きく自分の名前を書いた。
つまりは、『帯刀先生』と。

「はじめまして、帯刀といいます。横浜の普通科高校より転入してきました。まだまだ知らないことが多く、皆さんにご迷惑をかける事もあるとは思いますが、どうぞよろしく」

言い切り、指示された席に座る。
その瞬間を、見計らうように。右隣の席から、ここ数日見慣れた顔が声をかけてきた。
「ねぇ、帯刀君。自己紹介って、それだけ？」
「これ以上何を話せっていうんだよ、黛さん」
疲れたような俺の声に、少し考え込むような仕草をして。彼女はおもむろに声をあげた。
「先生、彼のために質問タイム、頂けますか？」
「――好きになさいな。どうせ貴女方、そうでもしないと集中できないでしょ」
黛さんと担任との会話で、いつの間にか俺の運命は決まっていた。そして、その声にあわせるように。クラスの女の子全体が、こちらに詰め寄ってきたのだ。
その後は、質問の嵐。とても、俺一人にさばけるような量と勢いではなかった。
対応にまごついているうちに、ポケットに突っ込んだ携帯がバイブレーションの低音を響かせた。
”助けが必要？”
メールの発信者は、黛薫子。既にアドレスを交換していたので、メールが送られてくること自体は不思議ではない。
けれども、流石にこのまま助けを求めるのは、あまりにもマッチポンプに過ぎた。

まあ、とりあえずは。
意識して、声を張り上げる。
「あー、名前なんだが、帯刀先生（たてわきせんじょう）と読む。父は香港人なんだがちょっとした日本史マニアで、『帯刀』って苗字の母と結婚した時に、息子にはこの名前をつけるって決めてたそうだ。」

理由は聞きかじりである。もしかすると、こんな官位そのものの名前をつける、もっと深い訳があったのかもしれない。あるいは、この苗字にしろもっと深い由来があったのかもしれない。けれども真意を知る前に、俺の両親は死んでしまった。
そして俺は随分と前から、この名前で生きている。何しろ、この日本では未だに外国人に対する忌避感は存在し、ガキがどうにか生きていくにはこの国の名前と国籍が不可欠だったのだ。
苗字も名前も気に入っているが、自己紹介が俺のちょっとしたコンプレックスとなった事に関しては、ちょっとした文句を言いたくもなる。

「前の学校じゃ、『たてわき』とか『せんせい』なんて呼ばれていた。まあ、好きに呼んでくれるとうれしい」

言葉を切る。そして、詰め寄ってくる面々を見回す。
俺の視線を受けようが構わずに視線の圧力を向けてくる人々に対し、俺は一計を案ずることにした。
この圧力が分散し、かつこの原因となった人物にお灸をすえる事ができる策である。

「流石に、この人数の質問に一気に答えるのは難しいな。俺は聖徳太子じゃない。だから、取次ぎ役を頼むとしよう」

そう言って、俺は立ち上がった。隣から身を乗り出していた彼女の頭を掴み、髪をぐりぐりと撫でまわす。

「それじゃ、皆様。質問はこの薫子ちゃん経由でヨロシク」

あえての、馴れ馴れしい呼称。まあ、ちょっとした仕返しである。案の定クラスの女子達は、嬌声をあげながら隣に殺到していった。埋もれる机。それを横目で見ている俺に、一通のメールが届く。

”恨むからねー！”

自業自得、そう返そうと思ったが、それだけでは味気ない。そう思い、ちょっとした一文を付け加える。

”お詫びとして、今度何かおごるよ”

俺も男だ。こういう機会は、逃してはいけないと思うのである。喧騒を脇に、そんな事を思うのだった。

一時間目の授業は、ほぼ自己紹介とそれに伴うぐだぐだで潰れた。更に分かるようで分からない二時間目の授業を聞き流し、やがて二時間目の休み時間となる。

それを告げるチャイムが鳴った瞬間、俺は席を立った。

見咎めたように、右隣から声がかかる。

「帯刀君、どっか行くの？」

「一年ぶりに会う弟分がいるらしいんで、ちょっと挨拶に、な」

彼女は、もっともらしく頷いてから。

「せっかくだから、その件についても今度聞かせてもらうよー」

「好きにしてくれ。迷惑かけた分は、言い値で返すさ」

そう返答し、俺は未だ喧騒残る教室から一年一組へと向かう。休み時間は短い。それは全ての学校共通であり、ＩＳ学園も例外ではない。足早に歩きながらも、俺は目的である教室の看板を目に捉えた。

「ここ、か」

深呼吸、一つ。そして、勢いよく教室の扉を引き開ける。教室の中を見回し、金髪の女の子に絡まれているオトコを発見。一年ほどの期間をあけた再会であり、何か改善していると思っていたのだが。トラブルと女の子に好かれている姿は、いつも通りであった。

一夏の様子に鼻からため息を吐き、助走をつけて両足で踏み切った。

そして、相も変わらずのアイツにドロップキック。無論、手加減は忘れない。

がらがしゃん、と机を揺らし、一夏は床にしりもちをついた。そして俺は、一回転式ドロップキックの受身状態から立ち上がり、小粋な再会の挨拶をしたのである。

「よう、色男。一年ぶりだが、調子はどうだい？」

床に向けていた顔を上げ、憤然と加害者（こちら）に向けて文句を言おうと

していた見慣れた顔が、驚愕の色に染まった。

「なんであんたがここにいるんだよ、しーさん！」

しーさん、とは俺のことである。中国は上海地方で『先生』をそう発音することから、俺の呼び名の一つとして定着している。

「まあ、色々あってな。お前みたいにＩＳの起動なんかできなかったもんで、二年の整備科だ。肩身の狭い男同士として、よろしく頼むわ」

手を伸ばし、一夏を引き起こして椅子に座らせる。そしてようやく、目の前で仁王立ちしながらぷるぷると体を震わせている金髪縦ロールに、俺は目を向けた。

「ああ、失礼した、お嬢ちゃん。昔馴染みとの再会に、つい興奮しちゃってな。俺はもう退散するから――」

言いかけた瞬間、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「まぁ、またの機会にでもうちの弟分と話しといてくれ」

憤然と喚き散らす声には構わず、俺は教室のドアをぴしゃりと閉めた。

どうせ、大して理解できない授業である。少しくらい遅れていっても、問題はないだろう。

そんな、ある意味でばちが当たりそうな考えを頭によぎらせながら、俺は自らの教室へと向かったのだった。

◆◆◆◆

三時間目、相変わらずの授業を聞き流しながら。俺は頬杖を突くような格好で、手の中に隠したブルートゥースのイヤフォンから流れる声を聞いていた。

『では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ』

『お、俺！？』

イヤフォンからは、一年一組における織斑姉弟の会話が筒抜けである。これも、先ほどの一夏との接触の際、小型の盗聴器をヤツの制服に仕込んでおいたおかげであった。

『ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――』

『自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無い。選ばれた以上は覚悟をしろ』

ＩＳに関してずぶの素人である弟が、クラス代表をやるのを反対しない。織斑（姉）は、結構なスパルタであるらしい。まあ、アイツの立場を自覚させるには、これくらいインパクトある手段でないと厳しいかもしれないけれど。

一夏は、もはや自らの環境において贅沢が言える立場ではない。ＩＳ学園の性質ゆえに、いわば猶予期間（モラトリアム）が許されているだけであって、ここ以外であれば、極端な話身体の端をチマチマ切り刻まれ、監禁状態での研究材料になんて可能性もあるのだ。

まあ、いきなりＩＳを動かして入学、なんて事になったヤツにそ

こまでを望むのは酷な話である。
少なくとも、未来の選択をするという一点において自由であった人間が、いきなりその自由がなくなったと気づいたならば、ほとんどの人間が絶望するしかないだろう。そんな環境の中でああも能天気にしているというのは、一種の才能だろう。まあ、アイツの事だから、気づいていないだけかもしれないけれど。

「――”人間は、自由の刑に処せられている”、か」

たぶんきっと、人はその大切さを失ってから気づくのだ。そして、気づいた時には何もかも遅すぎる。
俺は、自由らしき自由も無かったけれど。何しろ、ガキの頃から何やかんやと組織の上役に世話をしてもらっている。今更、そう簡単に変えられるものではなかった。

ふと、目の前に影が差した。
俺の席は、教室でも後方に位置している。教師が黒板に張り付くような授業形態をとっているＩＳ（ここ）学園では、誰かが来るはずも無い場所なのだ。
顔を上げると、笑顔を貼り付けた担任が腰に手を当て、仁王立ちをしていた。

「ミシェル＝フーコーの言葉ね。それがどうしたのかな、帯刀君？」

笑顔は笑顔でも、秀麗な顔に浮かべていたのは引きつった笑顔である。
まあ、それはそうだろう。俺はイヤフォンを右手で隠していて、利き手も右である。こんな状態ではノートに字を書くことなどできず、無論真新しいルーズリーフは真っ白のままであった。
かくなる上は、正直にぶちまけることが傷口を広げない知恵であ

る。

「自由と引き換えに得た権利に、どれくらいの価値があるか考えていました」

「なるほど、哲学的命題としては大変興味深いわね。でも今は、ＩＳの機械的構造についての授業よ」

結局俺は、廊下に立つように命令された。随分とレトロではあるが、『教師になったからには、一度は言ってみたかった』との言葉通り、担任の趣味に影響された罰であった。おまけとしては、俺に放課後の補習なども課されるハメとなったのである。もっとも後者の措置は、授業についていけそうもない俺に対する温情措置であったに違いない。

独り廊下に立ち、教室の壁にもたれかかった時。耳にぶら下げていたイヤフォンから、こんな声が聞こえていた。

『さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜、放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める』

結局、一夏は金髪縦ロールと勝負をすることになったらしい。まあ、ＩＳ同士の殴り合いならばそうそうアイツに傷などつかないだろうし、そもそも俺がどうこうできる範囲を超えている。元より、口うるさい保護者である織斑（姉）がこの勝負を肯定しているのだ。今回の件には、俺の出番などありそうも無い。

もとより俺には、ガキ同士の喧嘩に口を出すつもりはなかった。

「まぁ頑張れよ、一夏」

「普通に考えて、代表候補生にド素人が勝てるわけ無いとは思うんだけどねぇ」

口の中でだけ呟いた激励の言葉に、思いもかけない横からの合いの手が入る。

声の主は、水色の髪。そして、制服には黄色いリボン。ＩＳ学園生徒会長である更識楯無であった。

「……こんな所で油売ってていいのかよ、生徒会長。授業中だぜ？」

「……おあいにく様、廊下に立たされた転校生クン。私はこれでも仕事の途中なの」

おどけるような声で、返答が返ってきた。

一通り、下らない会話で笑いあう。けれども、その柔らかい雰囲気は長く続かなかった。

やがて彼女は、手に携えた扇子、何の変哲も無い竹の骨で出来たそれを弄びながら、こちらに鋭い目を向けた。

「さて、それではＩＳ学園の最強たる生徒会長として。同時に、対暗部用暗部たる更識家十七代目当主として、汝（なれ）、帯刀に問う」

開いていた扇子を音高く閉じ、その先を俺に向けた。

「織斑一夏、加えて鳳鈴音の護衛役として、それに足る力量はあるか、否や？」

彼女の声は、この二日間で聞いた事の無いような強い調子だった。

おまけに、同年代とは思えないような存在としての圧力があった。

彼女がさる旧家の当主だ、なんてことは調べる事は難しくなかった。

彼女の背負う家名やロシアの国家代表たるその地位がこの威厳、そしてその身から発される威圧感に繋がっているのだろうか。
いずれにしろ、俺が理解できるものではない。立場や家柄など、そういったものに縁が無い人間代表としてできることは、やせ我慢をし、歯を食いしばって普段通りにするだけだった。

「……回りくどい言い方をするなよ、更識の。一昨日のカチ込みを収めただけじゃ、俺の力量を見足りないってか？」

「あはっ♪　それじゃ、いつも通りの言葉遣いでいくわよ」

俺の態度は、少なくとも間違ってはいなかったのだろう。目の前の、生徒会長からの圧力は弱まる。けれども、場の空気は変わらずピンと張り詰めていた。

「学園のお偉方はあれで納得したみたいだけど、ね。学園内の警備を担う実働部隊としては、無能な味方は邪魔になるだけ。少しでも力がなければ、ここにいる意味がないわ」

言葉は軽いが、内容はキツい。けれどもそこにあるのは嫌味ではなく、プロフェッショナルとしての矜持だった。
俺も、所詮鉄砲玉ではあるが、仕事を通じて飯を食っている身である。途中で上から与えられた仕事をすっぽかせば、笑い事ではなく命の危険がある。
無論、弟分や妹分に対する危害を取り除けるならば、それはとてつもなく上等な仕事であった。少なくとも、無意味に殺し続けるよりは。
そういった意味でも、ここで引くわけにはいかないのだ。
俺は、覚悟を決めた。

「で、俺は何をすればいいんだ？」

「――私に一撃を入れれば、あなたの勝ち」

あなたは何を使ってもいい。私はこの扇子でお相手するわ、などと彼女はのたまった。

「……いや、それでいいのか？」

この条件ならば、俺も彼女も生身である。ＩＳを使うことでのアドバンテージが消えるのだ。そして目の前の彼女は、１７５ｃｍある俺よりも明らかに小さい。確かにメリハリがついた体型ではあるが、鍛錬のみで彼我の筋力の差を埋められるようには思えなかった。

そう、ＩＳがなければ、人体の性差がそのまま表れるはずなのだ。それはつまり、ＩＳという存在によっていつの間にか構築されていた女性優位の枠組みが成立しない事を示す。

けれども、俺の気遣いはどうやら無用であったらしい。

「別に、私も負けるつもりじゃないわよ。私には技があって、今まで積み重ねてきた鍛練がある。それを加味すると、キミとの体格差なんてお話にならないのよ」

傲然とした言葉であった。けれどもそれは、確かな積み重ねから発せられた事は、今の俺には疑いようがなかったのである。

「……よくもまあ言ってくれるな、更識の」

いくら差があろうとも、ここまで言われて引くなんて男ではない。ニヤリと笑うことで、俺は了承の意を伝えた。

返ってきたのは、随分と愉しげな声だった。

「あはっ、頑張れ、男の子っ♪」

「――傷をつけても、責任は取れないからな」

「あら、熱烈。でも、そうこなくっちゃ！」

ベルトに通し、上着の下に隠れるように腰裏に回していた革鞘から、肉厚のシースナイフを取り出す。

右手で順手に握り、半身に身体を構えた。肩には必要以上に力を入れず、それでいて、いつでも飛び出せるように下半身をたわめる。

そんな俺の前でも、目の前の彼女（ひと）は変わらずに自然体のまま。

尋常の試合のような立会い開始の合図など、どこにもなかった。

俺が刃物を向けた瞬間に膨れ上がる、彼女の気配。

国家代表とか生徒会長とか、そんな肩書きなどまるっきり無意味な世界がそこに広がっていた。

肩書きなどでは推し量れないような、圧倒的な強者。それが、俺の目の前にいる更識楯無だったのである。少なくとも、真っ当な手段で俺が勝利を収められるほど生易しい実力差ではなかった。

それが、無意識のうちに分かってしまったのである。

けれども、実力差があるからといって、怖気づくわけにはいかなかった。

――――恐怖を消すには、何をするべきだろうか？

俺は、叫んだ。

この原始的な手段によって、心理的な抑圧は吹き飛ばされると信じて。

「あああぁぁあぁぁあぁぁあッ！」

その勢いに任せ、足を強引に前へと飛ばした。

一歩、二歩、そして三歩。

リノリウムの床と重いダナー・ライトが衝突し、鈍い音を立てる。

俺は身体を低い前傾姿勢に保ち、下側から逆袈裟にナイフを振るった。

目の前の彼女は、竹の扇子を叩きつけるようにしてそれを迎撃する。

打ち合わされるその瞬間、場には金属音が響いた。

「――は？」

マヌケな声をあげた瞬間、俺は腹部に衝撃を受けて無様に吹き飛ばされる。

受身を取るような暇も無く、俺は床に叩きつけられてリノリウムの床を数メートルほど滑るハメになった。

床との摩擦熱で、制服の端が焦げた。おまけに、腹部には未だ鈍痛が残っている。

それでも、倒れている暇など無かった。呻き声を上げながら、俺はゆっくりと立ち上がる。

目の前では、前蹴りを繰り出した体勢のままに彼女はこちらをじっと見つめていた。

思わず、声が漏れ出た。

「……手加減してくれてるのか。有り難くて涙が出るねぇ」

「あら、達人（エキスパート）が素人（ビギナー）に対して勝負を挑んだんだから、これくらいは当然じゃない？」

「そいつはどうも。ついでにもう一つ教えてほしいんだが、その扇子、何か仕込んでるのか？」

「ご名答、って流石に分かるわよね。親骨を厚く作って、中に鉄を仕込んでるの」

「よくもまあ、そんなものを普段使いしてらっしゃるよッ！」

喉からこみ上げてきた苦い唾を飲み込み、代わりに言葉を吐き捨てる。

そして、俺は改めて手にナイフをぶら下げ、生徒会長へと向き直った。

真っ正直にやったって、どうしようもない。それならば、捻じ曲がった根性を発揮して奇策で行くしかないのだ。

「なあ、会長サン」

「なぁに、帯刀クン？」

「――個人的には、アンタの下着は今の白より黒のほうが似合うと思うんだよなッ！」

太股の隙間から見えていたパンツの色について大声で叫びながら、俺は手に持ったシースナイフを、会長の鳩尾へと向かって投げた。

「ご忠告ありがと。でも、唯一の武器を投げるなんて下策よ？」

余裕の顔で、事も無げに飛来したナイフを叩き落そうとした、その瞬間に。

俺は、手首に仕込んだホルスターからダーツの矢を抜き出し、同

時に二本を打ち出した。あえて狙いを定めず、おおまかに彼女の身体に当たる程度の精度で、だ。

「生憎、唯一じゃないんだな、これが」

質量差による速度の違いと、散々に陳の兄貴やらに仕込まれた腕も手伝って、ダーツはほぼナイフと同時に着弾する。

いかなる達人であっても、防ぐ武器が一つで飛来する凶器がバラバラに着弾するならば、それを容易に叩き落す事はできない。

おまけに、ナイフなどは四百グラム近い重量である。そう簡単に叩き落せるものではなかった。

だとすれば、受け手の取れる手段は一つ。その場から移動し、回避する事であった。

ならば俺は、その隙に距離を詰めて更なる一手を打ち出せばいいのである。場合によっては、それで詰みだ

踏み込み、距離を詰める。残り四本となったダーツを適当にばら撒けば、動きを止めて一発を当てる事などたやすい、そう思った瞬間に。

金属音と、軽やかに地面を蹴る音が、やけに近くに響いた。

普段は物の役にも立たない第六感が、頭の中でけたたましく警戒のサイレンを鳴らす。

無意識のうちに、床に滑り込むような形で身をかがめた俺の頭の上を、音を立てて回し蹴りは通り過ぎていった。

逃げそこなった俺の髪が風圧でちぎれ、はらり、と目の前に落ちた。

目の前に伸びる均整の取れた足を辿れば、引き締まった身体に不釣合いなほどの大きな胸。そしてさらに上には、水色の髪に隠された悪戯っぽい瞳が、俺を見下ろしていた。

「読みは悪くないし、ちょっとした小悪党程度なら十分対処できそうな腕はある、か。でも、これでおしまい？」

「……後学のために聞かせてくれ。あの状況から、どうやって今の状況に持っていった？」

「簡単な話。全部叩き落して、キミの思考を読んだだけよ」

その言葉に、俺は左手で頭を抱えながら呟く事しか出来なかった。

「――木刀ならともかく、そんな小さな扇子で叩き落すか。なんて、出鱈目な」

「――あはっ♪　ついでに教えてあげる。ＩＳ学園の生徒会長っていうのは、学園最強の称号なのよ」

無論、そこには血がにじむような鍛錬があったに違いない。とんだ使い手であった。

笑みを浮かべる彼女の目を、じっと見つめて。けれども俺は、ここで諦めるつもりはなかった。

左手首に巻いていたホルスターから、手首を返す事でダーツを抜き出し、そのまま左手だけで彼女の目に向かって打ち出したのだ。

速度も乗っていなかったそれは、広げられた鉄扇によって簡単に叩き落とされる。

「意気は良し。けど、この程度の苦し紛れでなにができるつもり？」

「……できるさ。今度の飛び道具を避けるのは、ちょっと辛いぜ？」

ダーツを投げる動作でカモフラージュしながら俺が右手で抜き出

したのは、制服のジャケットに仕込んでいた、ソード・オフされたレミントンのショットガンだった。
携帯性を追求するために、銃床と銃身を切り詰めて射程距離と集弾性を犠牲にした、歪な銃。けれどもそれは、引き換えにばら撒くように散弾をぶちまけるようになったことで、超至近距離では有用なものとなった。ともかくも、ひときわ物騒な銃である。

その引き金を、俺は躊躇無く引いた。
轟音と共に、散弾が突き刺さる。性能通りならば、見るも無残な死体の出来上がりであった。
薄いガン・スモークが、俺の目を灼いた。じわりと涙が滲むが、構わずフォア・グリップを引き、弾丸を装填する。
そして、再度の発砲。
もう一度同じ動作を繰り返し、最後に弾倉に残った四発目を吐き出そうと、引き金に指を掛けた時。
ふわりと漂う水の香りと、本来ならば聞こえるはずの無い声が放たれた。

「いたいけな美少女に銃口を向けるなんて、どういうつもりかなっ！？」

銃口は、金属の装甲によって蹴り上げられる。
反動で引き金が引かれ、発射された弾丸は壁をえぐり、窓のガラスを突き破っていった。
そして俺の目の前には、ＩＳを展開した更識が立って、いや、浮いていたのだった。

――やはり、この程度ではＩＳなんぞには歯が立たないらしい。
しかし、俺がショットガンに装填していた弾丸は、全て暴徒鎮圧用のゴム弾だったはずである。陳の兄貴曰く、至近距離からならば

プロボクサーのパンチを食らったような衝撃が与えられるらしいが、それ位ならば目の前の女性には傷なんぞ付けられないのではないか。
それにしては、反応が妙だった。いつもの余裕綽々とした表情ではなくて、やや焦ったような顔色をしている。

「ゴム弾だから、問題ないだろ？」

「――確かに、二発目と三発目と四発目はゴム弾ね。じゃあ、一発目に撃ち込まれたこの金属の弾は何なのかなー？　おねーさんに教えてみなさい？」

そう言って、ＩＳの眼前に展開された水の膜に捕らわれた散弾の一つを指差す。
確かに、金属製だった。
どうやら、一昨日にぶち込んでおいた実弾が弾倉に残っていたらしい。さすがに学校の中で、かつボディーガードとしては実弾はマズかろうと、昨日のうちに弾を詰め替えていたはずではあるのだが。
持ち慣れない得物どころか、銃なんぞ某組の際のトカレフが始めてである。そんな、不慣れな面が出てしまったのである。

「……悪い、間違えた。慣れてなくて、な」

「ＩＳの展開が少しでも遅れたら、私の顔が吹き飛んでたわよっ！」

結局は問題が無かったのだから、ＩＳでの蹴りは少々過激すぎる罰ではなかろうか。
床と水平に飛ばされながら、俺はそう思ったのだった。

余談ではあるが。

吹き飛ばされた後俺が身を起こした際には、生徒会長はもう目の前にいなかった。
代わりに俺の目前にあったのは、壊れた学園の壁とガラス、そして、ずらりと並ぶ教室から覗く好奇心あふれる瞳の群れと、我らが担任の怒り顔だったのだ。
どうにかショットガンだけは制服の中に戻す事ができたが、破壊痕とナイフなどの危険物は隠す事などできずに、俺はＩＳ学園転入初日にめでたく生徒指導室で説教を受ける事になった。
無論、俺だけが罰を受けるなど理不尽な事である。途中で生徒会長の名前を引っ張り出し、きっちりと同罪に仕立て上げたのは言うまでもなかった。

第二話（後書き）

うへへへ、一月以上開いたせいで、何書いてるか分からない状態だー
おまけにＩＭＥの変換も摩訶不思議なことになってますな
まあ、世界観構築の一助としての話で、ついでに会長をはっちゃけ
させてみました

Appendix02 『Les Misérables』

「ふぅーっ」

俺は、凝り固まった背筋を伸ばしながら、蛍光灯の灯る生徒指導室を後にした。

いかに毎日騒ぎが起こっているような場所であるＩＳ学園といえども、廊下で破壊活動を行えば問題となるらしい。

放課後の補習に加え、一昨日の罰が割り増しされて、ＩＳ学園の全貸出機の整備を一ヶ月間ほど継続するハメとなったのである。

しかも今回は、許可無くＩＳを展開した更識も同様である。

ざまあ見ろ。口中で呟き、俺は光の漏れるＩＳ整備室の扉を引き開けた。

「ざまあねぇな！」

「あら、うるさいわよ。殺人未遂犯さん！」

「帯刀君、遅いー！」

思わず漏れてしまった声に反応したのは、俺と同じく哀れな受刑者たる二人、更識楯無と黛薫子であった。

さすがに夜も遅い時間であり、整備室に残る人影は他には見えない。掛け値なしの罰であった。

「黛さん、悪いな」

他方にはにこやかに、そしてもう一方にはこんな声をかけた。

「更識、黙れ。お前の分もグチグチ言われてきたんだ、感謝しろよ」
「いやん、そんな事言うなんていけずねぇ。二人で熱い時間を過ごしたじゃないの」
「……本気で言っているのか？」
俺がドスの聞いた声を漏らすと、更識は俺の耳元に顔を寄せ、こそりと呟いた。
「悪いとは思ってるわよ。やむを得ないとはいえ、私もＩＳなんて使っちゃったしね。だから、今回の勝負はあなたの勝ちということにしましょ」
確かに、あの時彼女は扇子とその身のみで立ち会うと言った。ＩＳを展開させた時点で、その言葉には反している。釈然としない部分はあるが、彼我の実力差を考えたならばこれでも上出来と言えるだろう。
それに、過程がどうであれ俺はここにいる権利を勝ち取ったのだ。素直に喜んでもいいはず、なのだが。
「でもなぁ、更識。お前、あの時結構な手加減してただろ？」
どつきあいに関する専門家（プロフェッショナル）と、体格のみ優位に立つずぶの素人（アマチュア）。
確かに、そんな実力差はあった。だが、それ以外の点でも明らかな手加減があったように思えるのだ。
「――やっぱり、分かっちゃうかな？」

「分からいでか。お前が本気なら、俺はさっさと意識を刈り取られて終わりだった」

舌を出しながら上目遣いでこちらを見る更識の頭を軽く小突きながら、俺は続ける。

「単に技術的な差なら、武器を使うだけである程度は縮める事ができるだろ。途中で妙な隙を見せたり、追撃してくるはずの場面でそれが無かった。ここまできたら、子供でもおかしいと思うさ」

「まあ、ねぇ」

目を覗き込みながら、俺は再度問うた。

「どうしてだ？　話の通りならば、俺はお前にとって邪魔者にすぎない。プロの中にいるアマチュアなんて、モノの役にも立たないだろう」

「――まず、前提から間違ってるのよ。生徒会長なんかに、誰かを退学させる権限なんて無いの」

どっかの女学院じゃあるまいし。しれっとそんな言葉を吐いた彼女に、俺は開いた口がふさがらなかった。

つまりは、あそこで俺が負けても、ここにいる事は可能であったということだ。

「……あの時の前口上にあった、『更識家十七代目当主』としてはどうなんだ？」

「ＩＳ（ここ）学園は、いくら対暗部を旨とする更識家でもそうそう干渉で

きる場所ではないわ。もともと、あなたの転入は学園の上層部への外部からの働きかけがあったから決定されたんだし、私が入る隙なんてないの」

「じゃあ、何で俺はあんな所で殴られなきゃならなかったんだ！？」

俺の小さな叫びをよそに、更識は鼻歌を歌いながら、打鉄を整備中である黛さんの首に手を回して抱きついていた。

その体勢のままこちらに向き直り、悪戯っぽい視線を向けた。

「だって、私の薫子ちゃんをあんな怖い目にあわせたんだもの。友人たる私からも罰があってしかるべきじゃない？」

「――つまり、一種のやつ当たりか」

「ええ！」

顔に満面の笑みを浮かべていた更識にアイアンクローをかけながら、マニピュレーター一対を伸ばして作業をする黛さんの手元を、俺は覗き込んだ。

細かな部品らしきものこそ見えど、肉眼では生憎細かな判断はつきそうにない。

聞き流していた授業の内容を思い出しながら、近くの用具棚から作業用ステータスゴーグルを取ろうと、手を伸ばした。

「はい、お探しのものはこちらー？」

いつの間にか、アイアンクローから抜け出していた更識からゴーグルを受け取り、頭から被る。ゴーグルから伸びるラインを打鉄のジャックに差し込めば、目の前に広がるスクリーンに打鉄の損傷情

報が表示された。

「なるほどなぁ、こういう風になってるのか」

俺ののんきな声に、作業をしていた黛さんは振り返り、ちょっとした解説を加えた。

「見る分には、それで大丈夫なんだけどねぇ。念のために聞くけど、帯刀君はＩＳ起動できたりしないよねー？」

「一夏じゃあるまいし、無理だな」

「だよねぇー」

俺の返答にそう言葉を漏らし、黛さんはマニピュレーターの先をぐるぐると回しながら続けた。

「電子系だけなら、このゴーグルと簡単なテスター、あとはちょっとした工具だけで調整できるんだけど、駆動系や外装部の金属疲労とかに対処するとなると、ＩＳのハイパーセンサーやこの作業機械（マニピュレーター）指が必要となるの」

そんな話を、俺は打鉄のつるりとした装甲を撫ぜながら聞く。

とどのつまりは、その方法は俺には使えないということだった。

「男性がＩＳの整備工として活躍している例もなくはないけど、そういった人たちはほとんど職人といっていいほどの熟練工なのよー」

「それじゃ、俺は何をすればいいんだろうな」

「もともと訓練用に使用するＩＳは、そこまで大掛かりな整備が必要なものは多くないの。ほとんど外装の汚れ取りとか、簡単なチェックだけで終わってしまうものばっか。帯刀君はまず、そういった事を積み重ねてＩＳに関する知識をつけていけばいいんじゃないかな。先生達だって、すぐに難しい整備ができるなんて思ってないよー」

黛さんの話によれば、つまりは、俺の仕事のほとんどが肉体労働ということだった。

それならばということで、俺は汚れたままのＩＳにブラシを持って歩み寄る。

「そういえば。ねぇ、帯刀君」

「なんだい、黛さん」

「なんで、たっちゃんのこと、いきなり呼び捨ててるのー？」

携えていたマニピュレーターを放り投げ、メモを持ちながら迫ってくるその姿は新聞部副部長の面目躍如であった。

けれどもその問いは、期待されたようなものではないのだ。色事とか艶めいた話であるはずがなく、ごくごくシンプルな答えである。

「――やつ当たりで人に殴りかかってくるようなヤツには、『さん』付けなんてもったいないってだけさ」

本来なら社会的立場が上の人間でも、そんな輩に敬称をつける必要はないのである。

反論するように声をあげた更識の努力は空しく、翌日の新聞記事にセンセーショナルな見出しが踊った事は、言うまでもなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3710y/

嘘吐きの弾丸

2011年12月18日01時53分発行